

---

# 北海道からの転校生

桜桃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

北海道からの転校生

### 【Nコード】

N1896M

### 【作者名】

桜桃

### 【あらすじ】

北海道から転校してきた美帆。蘭と園子から新一のことを聞き、抱く感情とは！？  
カップリングは新蘭です。  
が、まだ幼馴染で、新一はコナンのまま。  
視点は美帆！！

この話は、名探偵コナン 自作小説

にも掲載されています。

## 1話 工藤新一

「開美帆です。好きな食べ物はマグロの刺身。  
趣味は歌うこと。部活は合唱部に入ろうと思っています。  
よろしくおねがいします!」

私は、初めて転校した。

場所は北海道から。

同じ合唱部の愛美とみのりや友達のれいみと別れるのは  
さびしかったけど、ここで新しい友達が作れると思うと、  
わくわくする。

「私、鈴木園子！園子って呼んでね。」

「私は毛利蘭。空手部に入ってるの。  
美帆ちゃん、よろしくね。」

「うん。よろしくね、園子ちゃん。蘭ちゃん！」

こんな可愛い子も空手をやることもあるんだと内心驚いた。

そういえば、れいみもやってたっけ。

たわいもないおしゃべりをしていたのだが、

急に園子ちゃんが真剣な表情をして話し始めた。

「美帆ちゃん、2年B組に入ったからには、ちゃんと役目を果たしてもらわよ?」

「「役目?」「」

私と蘭ちゃんは声が重なる。

「そ、役目。」

1つ、蘭と新一君の仲を認めること。

2つ、新一君が何時帰ってきてもいいように、2人のことを知って、

冷やかす準備をする。

3つ、冷かす言葉は、絶対『夫婦』がはいること!」

「そ、園子！私達夫婦じゃないもん！！」

「あゝ、まだ夫婦じゃない。ね。」

「園子！！」

「で、その新一君ってどこにいるの？」

「あー、事件追っかけて、どっかほつつき歩いてるんでしょうよ。」

「事件？」

「美帆ちゃん知らない？高校生探偵工藤新一。」

「高校生探偵・・・あー！あるある。」

「前の学校でも噂だったよ。写真をくりぬいている人もいたし！この学校の生徒だったんだ。」

「そ、毎日毎日らぶらぶ見せられて大変だったのよ？」

ラブラブ・・・

だったらなぜ、蘭ちゃんをほっというて、事件なんかを

追っかけているのだろうか。

その、工藤新一は本当に蘭を好きなのだろうか。

工藤新一という人物に一度、会いたい。

そして、蘭への気持ちを知りたい。

そんなことを思っていた。

## 1話 工藤新一（後書き）

美帆「ありがとー!!」

桜桃「美帆が出してほしって言うから出したまでです。」

美帆「美帆みたい!!」

桜桃「実物はもつとうるさいんだけど、1話は隠してみた。」

美帆「えー？美帆、そんなにうるさくないよ。」

桜桃「いや、結構皆迷惑してるから。」

美帆「そうかな？」

桜桃「うん。」

つてことで、友達視点の小説です。

勿論、本人ならこう思うというアドバイスもありますので。

## 2話 諦めなよ

下校。

蘭ちゃんが預かっている『コナン君』という男の子と一緒に帰ることになった。

「とにかく、新一君と蘭はらぶらぶなのよ。」

園子ちゃんが2人の歴史を熱く、語ってくれた。

「でもさ、なんでそんなに大事なら、帰ってこないの?」

3人は黙ってしまった。

でも、おかしいじゃない。

「ねえ、おかしいよ。工藤新一って本当は蘭ちゃんのこと好きじゃないんじゃない？」

「え。」

声をあげたのは蘭ちゃんとコナン君。

「だって、本当に好きなら、そんな事件、ほっぽって  
蘭ちゃんに会いに行くんじゃない？それに、事件を諦められない  
としても、

学校に通うことくらいできると思う。」

「そ、そうだけど・・・でも、新一君が蘭を好きだということは事  
実よ。」

「なんで？工藤新一本人が好きだって言ったの？証拠はあるの？」

気になったら、しつこいくらい聞いてしまっ

私のくせ。

よく、愛美やみのりに怒られたっけ。

でも、いまさら変えようがない。

「蘭ちゃんが工藤新一を好きだったことはわかる。  
でもさ、工藤新一が蘭ちゃんを好きだという証拠はないでしょ？  
蘭ちゃんは、叶わぬ恋なんだって！諦めなよ！！」

「ちょっと、美帆ちゃん。言っていいことと、悪いことがあるわよ  
？」

「え？」

「相手が自分を好いてようが好いてまいが、

好きなものは好きなの！簡単に諦められる恋なんて、本当の恋じゃないわよ！

知り合ったばかりの子が知ったようなこと言わないでよ！

2人の絆がどんなもんなのかなにも知らないくせに！！

ほら、行くわよ2人とも！！」

怒ちゃった園子ちゃんとあとからこつちを窺いながら、

園子ちゃんのあとを追う2人。

どうして

園子ちゃんは怒っちゃったんだろう。

わかんないや！

明日聞こう！

## 2話 諦めなよ（後書き）

美保「こんなに悪くないよ！」

桜桃「いや、実物のあんたはもっとひどいって。」

美保「えー！？そんなことないって。」

桜桃「あるある。」

### 3話 考え方

「おはよー!」

私はいつもの調子で挨拶をした。

「おっはよ♪ 蘭ちゃん。」

「おはよう。美帆ちゃん。」

いつもの蘭ちゃんだ。

園子ちゃんも怒ってたけど、一時的なものだったんだね♪

「おはよう。園子ちゃん。」

「おはよう。」

あ、美帆ちゃん、あれから考え直してくれた？」

「え？なにを？」

「昨日、私が言ったこと。ちゃんと、考え直してくれたわよね？」

「あー、「蘭ちゃんが工藤新一を好きだったことはわかる。」

でもさ、工藤新一が蘭ちゃんを好きだという証拠はないでしょ？」

蘭ちゃんは、叶わぬ恋なんだって！諦めなよ！！」って言ったやつ？」

「そうよ。」

考え直すって・・・

なにを考え直すの？

私の言ったこと、なんか変だった??

「いや！お母さんが言ってたよね、こいついつときはとりあえずあやまる……！」

「いや……ごめんごめん！あははは」

つい、笑ってしまった。

これは本当にやばいぞ。

これで何度みのりを怒らせたことか。

何度愛美に殴られたことか。

園子ちゃんが怒りに到達してしまったのだろうか。

「そ、園子ちゃん？」

「美帆ちゃんには好きな人を諦めることが、  
どんなに辛いことかわかる？それがわからないと、  
私、美帆ちゃんと友達。やってられない。」

園子ちゃんは行ってしまった。

好きな人を諦める？

そんなの、次の恋をみつけたらいいことじゃない。

つらい？

つらさを埋めるために好きな人を別につくればいい。

私にだって、好きな人くらいいるけど、

駄目だったら諦めると思うし。

いったい、私の考えのどこがわるかったというのだろう。

—  
それから、学校を終え、

部活も終わり、私は一人で帰った。

自分の考え方のなにかいけなかったのだろうか。っといことを考え

るのも忘れ、上機嫌で家へと向かった。――

### 3話 考え方（後書き）

美帆「ふふ」

桜桃「美帆って本当、アホだね。」

美帆「えー！？」

桜桃「つてみのりが言ってたよ。」

愛美よりアホなんじゃない？つて。」

美帆「うそー！？」

桜桃「いや、本当。」

それにしても・・・ほんとひどいね。

美帆。」

美帆「美帆じゃないもん！あんたが勝手にかいただけでしょ！」

桜桃「は！？出してほしって言ったの美帆じゃん。」

たしかに、フィクションはありますよ。

現実の美帆はもっとうるさいし、もっとしつこし、  
もっとひどいしー！」

美帆「ひどい」

桜桃「だから、美帆ほど ひどくないって・・・」



#### 4話 いめんね。

「ただいま」

「おかえり。」

「お兄ちゃんは？」

「部屋に閉じこもってるんだけど……どうしたんだろう。」

「私、ちょっと見てくるね！」

お兄ちゃんの拓也は珍しく居間にいない。

部屋に閉じこもってる？

ほんと、どうしちゃったんだろう。

\*  
\*  
\*  
\*

コンコン

「おにいちゃん。」

シーン

コンコン

「おにいちゃん。  
・・・もう！入るからね！」

がち  
ゃ

「・・・うわぁー！！」

お兄ちゃんは部屋のすみっこに体育座りでうずくまっていた。

「どうしたの？」

「ああ！　また”振られた？”」

「・・・よくもずけずけと言えるな。」

「あ、図星？」

「はあ。今回は本気で好きだったのにな。」

「だったら、他に好きな人を見つければいいじゃない！」

「そうそう。」

「これが一番！」

「あの人、本気で好きなやつを諦めろっていうのか？  
たとえ、相手が好きじゃなくても、諦められないよ。」

「どうして？」

「最初はお前とおんなじ考えをもってた。  
でも、いざ、別れるとなると、萌が本気で好きなんだと思ったんだ。」

したら、諦められない。そう、思えた。」

「そついうもんかな？」

「お前さ、もし、お父さんがお母さんともう、会うな。って言われたら、どうする？」

「絶対いや！」

「だろうな。それと同じことだよ。本気で好きな人を諦めろ。なんて言われたって  
納得するわけがない。だろ？」

そうか。

そういうことだったんだ。

だから、蘭ちゃんは諦めないんだ。

私、もし、お父さんにお母さんに会っな。なんて言われたら、

きっと、どうしてつてもものすごく怒ってたと思う。

だから、園子ちゃんは怒ったんだ。

蘭ちゃんの気持ちを変わりに言っただ。

明日、あやまるう。

そして、

精一杯、蘭ちゃんを応援してあげなくちゃ。

#### 4話 いめんね。(後書き)

桜桃「本当に悪かったよね、美帆。」

みのり「だって、あの、美帆だもん。」

美帆「なにそれー!？」

みのり「美帆って、デリカシーなさすぎだし。」

今日さ、どうやってたら園子が怒るだろうって

桜桃に言われたんだけど、ひどいことがありますて、  
なに言っているかわからなかったもん。」

美帆「ひどい!！」

桜桃・みのり「美帆ほどひどくない!！」

美帆「2人して言わなくても・・・。」

5話 よろしく！（前書き）

あと、ちょっとで

終わっちゃうかも・・・？

## 5話 よろしく！

「ごめんなさい！私、蘭ちゃんの気持ちを考えず・・・  
そして、園子ちゃんの優しさにも気づかなかった！  
本当に、ごめんなさい！！」

「・・・いいよ、顔あげて？  
大丈夫、私は気にしてないから。ね、園子。」

「まあ、むかついたのは本当だけど。」

でも、ちゃんとわかってくれたみたいだし？  
また、友達として、やり直せるかな？」

「本当・・・に？」

「あつたりまえよ！園子さんはうそつかないの。」

「園子ったら・・・  
でもさ、美帆ちゃん。私たち、友達だよ。ね？」

「・・・もしかしたら、また、デリカシーないこと言っちゃうかもよ？」

「そしたら、私たちが注意すればいいことですよ？」

「本当に、本当にいいの？」

「もちろん!」「」

「ありがとう。本当に、ありがとう!」

「よろしくね、美帆ちゃん。」

「うん!よろしく、蘭ちゃん、園子ちゃん!」

\*\*\*

私たちは絶え間なく、おしゃべりしていた。

工藤新一のこと。

まあ、ほとんどが蘭ちゃんの惚気だったけどね？

でも、よくまあ、あそこまでわかるわよね。

「新一は推理小説には目がない。」

「ホームズを目標としてるんだけど・・・」

「帰ってきたらハンバーグとレモンパイ作るの。」

「え？どうしてって？だって、新一の好物だもの。」

「目立ちたがり屋で困っちゃうのよね。」

まあ、ここまでならいいでしょう。

問題は、これだ。

「おば様はこの入浴剤の香り、きっと好きなのよね。  
あとで新一に送ってもらおう！」

「おじ様、とおば様、夫婦喧嘩しなきゃいいんだけど・・・。」

「おじ様、女心をちゃんと理解してもらわないと・・・  
でも、ちゃんとおば様のことは考えてるのよね。」

「おば様、交通ルールはちゃんと守ってるかな？  
スピードの出しすぎしてなきゃいいんだけど・・・。」

相手の親のことまで知り尽くしているかのよう。

蘭ちゃん、いつお嫁にいつても大丈夫だよ。

私は、そんなことを思っていた。

5話 よろしく！（後書き）

美帆、最悪な事態になります！

せっかく仲良しになったのにね？

## 6話 また、いつか。

蘭ちゃんたちと仲良くなって早2日。

本当、いろいろとあったな。

しみじみと思う。

「美帆、ちょっと来なさい。」

「はい。」

\*\*\*

「どうしたの？」

「お父さんの転勤でこっちに来たでしょ？」

その転勤が他の人に代わることになかったの。  
だから、北海道に戻るようになったわ。」

「え！？せっかく、仲良くなったのに・・・」

「ごめんね。」

せっかく、せっかく仲良く。

でも、困らせられない。

高校2年生にもなって、駄々こねることはできない。

「ううん。しょうがないよ。わかった。いつなの？引越し。」

「明日。」

「明日！？」

「急に決まって、明日は来なくていいみたいなこと言われて、じゃあ、明日引越し。ってなったのよ。」

「うそ・・・」

「明日は学校には行けないから、今日のうちにお別れしなさいよ。」

「・・・・・・・・・・わかった。」

\*\*\*\*\*

「美帆ちゃん。おはよう。」

「おっはー。美帆ちゃん。」

「・・・」

「どうか・・・したの？」

「相談ならのるよ？」

2人の顔を見ると、緊張の糸が切れた。

「うわあああ。私、蘭ちゃんたちとお別れしたくない！」

「どうしたの？美帆ちゃん。」

「そっか。そういうことがあったんだ。」

「美帆ちゃん。大丈夫。私たち、いつまでも友達だから！」

「そうよ。手紙もだすし。」

「・・・でも、でも・・・」

「でも、決まっちゃったんでしょ？」

「うん・・・」

そう、もう、決まってしまった。

それに、明日には引越し。

今日しか話せない。

もっと、もっと時間がほしかった。

もっと、もっと話したかった。

「美帆ちゃん。いつでも、遊びに来てよ。」

「そうよ！そのときは、家に泊まって！～！  
いくらでも空いてる部屋はあるし。」

「いいの？」

「あったりまえ。」

「いつでもおいで。」

うれしかった。

とっても。

北海道に戻るのはうれしい。

友達が戻ってくる。

との同時に新しい友達を手放す。

でも、まだ、つながってられる。

遊びに来れば、いつでも会えるんだ。

\*\*\*\*\*

出発

「向こうがいやになったらきなさいよ？」

「わかった。いやになることはないと思うけどね。」

「ああ、愛美さんやみのりさん、れいみさんもいるしね。」

「うん。怒られたり殴られたりするだろうけど、楽しめると思う。」

「そっか。」

「2人とも、よかったの？学校。」

「うん。先生にも許可とったしね。」

「そうなんだ。」

沈黙。

でも、最後まで、笑顔で別れたい。

美しい、思い出にしたい。

「じゃあね、またいつか!」

「ばいばい!」

「本当に、遊びに来なさいよ?」

「うん」

私は、旅立った。

友の居る場所へ。

友の居る場所から。



## 6話 また、いつか。（後書き）

美帆「もしかして、これで終わり!？」

桜桃「あ、大丈夫。次で終わり。」

1年後だから。」

美帆「本当!？よかった。その他に美帆はでれないの?」

桜桃「考え中。どうしようかな?」

美帆「えー?出してよ出してよ!?!」

桜桃「考えとく。」

美帆「ぶー。」

桜桃「かわいくないからね。」

## 最終話 あれから

あれから1年。

遊びに行くと言ったのに、遊びに行かなかった。

それどころか、連絡すらしていない。

「美帆ー！あなた宛に手紙！きてるわよ。」

「手紙？」

誰が手紙を？

そんな相手いない。

封を切った。

” 結婚式招待状。

工藤新一  
毛利蘭  
”

結婚式の招待状だ。

「蘭ちゃん・・・つと工藤新一!？」

そっか。結ばれたんだ。

よかった・・・

封の中には1枚の紙があった。

” 美帆ちゃんへ

遊びにも来ないし、連絡しようにもできないから、  
ずっと気になってたんだ。

でもね、知り合いの刑事さんに事情を話したら、  
教えてくれて、美帆ちゃんの居場所がわかったの。

美帆ちゃんが帰って8日後に新一が帰ってきてくれたんだよ。

高校3年生になり、新一と一年ほど付き合った今、結婚することになりました。

招待状に書いてあったとおり、7月22日が式だよ。

ちよつとしか話したり、遊んだりはできなかったけど、  
美帆ちゃんは大切な友達。だから、呼ぶことにしたの。

用事がなかったら、来てくれないかな？

新一も楽しみにしてるよ。

毛利蘭”

「ら・・・んちゃ・・・ん。」

私は、引っ越して、北海道に戻ってから、

蘭ちゃんに住所を聞くのを忘れていたのに気づき、連絡できなかったんだっけ。

「蘭ちゃんに行くって伝えなきゃ。」

手紙に書いてあった電話番号を押した。

P  
R  
R  
R  
.  
.  
.  
.

『はい。毛利です。』

「あ、開<sup>ひらき</sup>美帆<sup>みほ</sup>です。」

『美帆ちゃん!？』

「蘭ちゃん?」

『うん!どうしたの?あ、招待状届いた?』

「うん。あのね、出席するから。  
うん、うん、じゃあ、来月の7月22日に。  
またね。」

ピッ

久しぶりに会えるんだ。

私は、スキップしながら

部屋に戻った。

## 最終話 あれから（後書き）

後書き

美帆「えー！？結婚式、行かないの？」

桜桃「行くよ？ちがうお話でね。」

美帆「はやく！早く書いて！！」

桜桃「あ、あとでね……」

つてことで、結婚式編は、『ウゝアージンロード』で……！  
よろしくおねがいします。

桜桃

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1896m/>

---

北海道からの転校生

2011年10月7日03時47分発行